

次の文章を読んで、あとの問に答えよ。

大式実政は春宮の御時¹の学士にて侍りしを、時なくおはしませば、「かまへてまゐり寄りぬ事にならむ」と思ひけるに、さすがいたはしくて、甲斐守に侍りければ、かの国より上りてまゐるまじき心がまへしけるに、下りけるに、はなむけさせ給ふとて、

州民縦発甘棠詠 莫忘多年風月遊

（州の民縦ひ甘棠の詠を発すとも 忘るること莫かれ多くの年の風月の遊び）

とつからせ給へりけるになむ、A 忘れまゐらせざりける。甘棠の詠とは唐国に国の守になりける人の宿れりける所に、山梨の木の生ひたりけるを、その人の都へかへりて後、政うるはしくしのばしかりければ、「この梨の木伐ることなかれ、かの人の宿れりし所なり」といふ歌をうたひけるとなむ。

さて、帝位につかせ給ひて後、「左中弁に加へさせ給へ」と申しければ、「つゆばかりもことわりなき事をばすまじきに、いかでかかる事をば申すぞ。正左中弁にはじめてならむ事あるまじき」よし、仰せられければ、藏人の頭にて資仲の中納言侍りけるが、かさねて申しけるは、「実政申すことなむ侍る。」「木津の渡りのことを、一日にても思ひしり侍らむ」と奏しければ、その折思ほししづめさせ給ひて、はからはせ給ふ御けしきなりけり。昔、実政は春宮の春日の使にまかりくだりけり。隆方は弁にてまかりけるに、実政まづ船など設けて渡らむとしけるを、隆方おしさまたげて、「待ち幸ひする者、なにに急ぐぞ」など、ないがしろに申し侍りければ、からく思ひて、「かくなむ」と申したりけるを、思ほし出だして、「このことわり天照御神に申しうけむ」とて、左中弁には加へさせ給ひてけり。隆方はかりなき心ばへにて、殿上に司召⁵の文出だされたるを、上達部たちかつがつ見給ひて、「なにになりけり」「かれになりたり」などのたまはせけるを、「隆方仕うまつりて侍らむ」など、えたり顔にいひけるを、「さもあらぬ者のかみに加はりたるぞ」など人々侍りければ、うちしめりて出でけり。次の朝の陪膳は、隆方が番にて侍りけるを、「B まるらじ。こと人を催せ」と仰せられるほどに、午の時よりさきに、隆方まゐりて侍りければ、帝さすがに思ほしめして、日頃は御⁶召して、うるはしく御髪かかせ給ひて、たしかにつかせ給ふ御心に、今日は待ちけれども、程過ぎて出でさせ給へりけるに、陪膳仕うまつりて、弁も辞し申して、籠り侍りにけりとなむ。

（注1）春宮の御時：後三条天皇が春宮（皇太子）であった時。

（注2）泔：髪を洗い桶で整えるときに使う水。

（「今鏡」より）

問一ノ一 空欄A・Bに入る最も適切な語を、それぞれ次の中から一つ選び、答一ノ一の欄にマークせよ。

ア…とみに イ…よも ウ…あに エ…な オ…え

問一ノ二 傍線部1「時なくおはしませば」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ二の欄にマークせよ。

- ア…実政は春宮に学問をお教える機会もないので
- イ…実政はすでに古い先は短いと自覚していたので
- ウ…実政は都で出世する見込みもないので
- エ…春宮は失意の状態でいらつしやるので
- オ…春宮はだいぶ歳をとられていたのだ

問一ノ三 傍線部2「政」の読み方を、記述解答用紙の答一ノ三の欄にひらがなで記せ。

ア…形容詞＋助動詞＋助動詞＋助詞

イ…形容詞＋助動詞＋助詞＋助詞

ウ…形容詞＋助動詞＋助詞

エ…形容詞＋助詞＋助動詞＋助詞

オ…形容詞＋助詞＋助詞

問一ノ五 傍線部4「待ち幸ひする者、なにに急ぐぞ」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ五の欄にマークせよ。

- ア…ずつと待ち続けてやつと春日の祭の使者という名誉ある役目を得たからといって、そんなにはりきって急ぐ必要もあるまい。
- イ…やつと春日の神に参詣して幸運を祈る機会を得たからといって、そんなに先を急がなくてもいいではないか。
- ウ…急がば回れというではないか、そんなにあわてて先を急いだとしても、ろくなことはないぞ。
- エ…ここで春宮の御到着を待っていれば御褒美を頂戴できるのに、なんでそんなに先を急ぐのだ。
- オ…春宮の即位というあてにならない幸運を待っているのに、なんでそんなに先を急ぐのだ。

問一ノ六 傍線部5「隆方仕うまつりて侍らむ」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ六の欄にマークせよ。

- ア…隆方は昇進していることでしょう。
 イ…隆方が司召しを執り行えということでしょう。
 ウ…隆方が皆さんのことを帝にお願いしてみましよう。
 エ…隆方は中納言殿にお願いしてあるのですよ。
 オ…隆方にも拝見させてください。

問一ノ七 傍線部6「さもあらぬ者」とは誰のことか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ七の欄にマークせよ。

- ア…上達部 イ…実政 ウ…資仲 エ…隆方 オ…春宮

問一ノ八 傍線部7「帝さすがに思ほしめして」とあるが、帝はどのように思ったのか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ八の欄にマークせよ。

- ア…はやし イ…ゆゆし ウ…いとほし エ…くやし オ…にくし

問一ノ九 次の漢文には、「甘棠の詠」の由来が述べられている。これを読んであとの間に答えよ（設問の都合で一部返り点、送り仮名を省いたところがある）。

武王^(注1)之時、召公^(注2)為^レ西伯^(注3)行^レ政於南土。郷邑^ニ有^レ棠樹、決^レ獄其下^ニ。自^レ侯伯至^レ庶人各得^レ其所^ニ。無^レ失職者。及^レ召公既去^レ南國之人、不^レ忍忘^レ之、而思^レ其所舍^ル之木^ヲ。相与告^レ戒曰^{ハク}、C伐^レ是召公之所舍也。三歎三詠、不^レ能^ハ自^レ已^ハ。詎敢加刃而毀傷之乎。古老指^レ甘棠^ヲ以^テ告^レ其子孫、而誦^レ召公所^レ教、使^レ之世守^{リテ}而莫^レ忘^ル也。

（李黄『毛詩集解』より）

（注1） 武王…殷を倒し周王朝を建てた天子。

（注2） 召公…武王の弟。

（注3） 西伯…職名。

（I） 古文の本文中にある「政うるはしく」に相当する句を、この漢文の中に求めるとすれば次のうちどれか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ九（I）の欄にマークせよ。

- ア…召公為西伯、行政於南土
 イ…郷邑有棠樹、決獄其下
 ウ…各得其所、無失職者
 エ…南國之人、不忍忘之
 オ…使之世守而莫忘也

（II） 空欄Cに入れるのに最も適切な漢字一字を、次の中から一つ選び、答一ノ九（II）の欄にマークせよ。

- ア…当 イ…勿 ウ…以 エ…忍 オ…如

（III） 傍線部「詎」に最も近い意味を表す漢字一字を、次の中から一つ選び、答一ノ九（III）の欄にマークせよ。

- ア…奚 イ…若 ウ…將 エ…囚 オ…宜

（IV） 漢文の内容に合致するものを、次の中から一つ選び、答一ノ九（IV）の欄にマークせよ。

- ア…召公は、人民が武王の善政を忘れないよう、甘棠の樹を植えて武王を賛美した。
 イ…召公は、甘棠の樹の下で人々を戒めて、武王が善政を行った事を後世に伝えた。
 ウ…西伯は、召公が甘棠の樹のもとで行った政治を歌にして、樹を切る事を戒めた。
 エ…人々は、子孫が召公の善政を忘れないよう、甘棠の樹を植えて召公を賛美した。
 オ…人々は、甘棠の樹を切ることを戒めて、召公が善政を行った事を後世に伝えた。

二 次の文章を読んで、あとの問に答えよ。

共同体とは何かという問いは歴史的、あるいは時代の文脈のなかで語るべき課題だと私は思っている。なぜなら過去とは時代的な問題意識をとおしてみえてくるものだからである。

関心にも大きな影響を与えることになった。

日本で広く環境問題が意識されるようになったのは、一九五〇年代の終わり頃にさかのぼる。熊本のスズメバネ工場からた有機水銀混じりの廃液が、いわゆる水俣病を引き起こしたのである。そして一九六〇年代に入ると、都市公害問題が広がっていった。

公害問題は深刻で、光化学スモッグは東京など大都市の人々を悩ませていたし、死の川、死の海が各地に生まれていた。

意識は一九七〇年代以降の環境問題とはとらえ方が大きく異なっている。六〇年代までの理解のされ方は、それらはあくまで公害問題であり、悪い企業や適切な手を打とうとしない政府や行政の問題としてつかみとられていた。悪い企業が公害をまき散らしている、悪い政府や行政が都市公害を野放しにしているという認識であり、逆から述べれば政府や行政が企業への指導も含めて適切な手を打てば公害問題は解決するととらえられていたのである。

一九七〇年代以降の環境問題のとらえ方はそれとは違っている。私たちの文明的な生活自体が環境悪化の原因として理解されるようになった。我々は環境悪化の被害者であるとともに加害者でもあるという認識が広がりはじめたのである。

ただし七〇年代の日本の環境理論は、それがアメリカ型環境理論に大きく影響されていたこともあって、「人間の自然・環境保護」の理論であったことは記憶しておかなければならないだろう。人間の生活の持続に黄信号がともっている、だから人間の暮らしを守るためには自然・環境を守らなければいけないという人間中心主義的な環境理論が支配的だったのである。ところがこの論法でいくと困った問題に直面する。というのはこの論法では、人間のための開発の必要性の主張と同じ土俵に上がってしまったために、自然保護が開発かをめぐる、同じ基盤に立った論争がおこってしまうからである。どちらも「人間のために」、なのである。

ここからアメリカ型の自然保護論は「自然権」理論へと向かう。自然自身が、人間のためになるかならないかにかかわらず、生存権をもっているという理論である。しかしこの論法にも無理がある。なぜならすべての自然の生命体に自然権があるとするとするならば、そしてこの権利は侵してはならないのだとするならば、人間の活動自体が否定されかねないからである。たとえば農地を拓くこともある種の生命体に悪影響を与えることになるだろう。原生的自然がなければ生きていきにくい生物も存在するからである。ウイルス性シツカンにかかったときそのウイルスを殺す薬を投与することはどうなるのか。ウイルスにも生存権があるとするとするならば、それだけを特例として認める根拠はないということになる。しかもこの特例を認めてしまえば、「人間のための」自然保護と同じことになってしまうのである。

自然を保護するとはどのような思想にもとづいてなのか。この問いは簡単ではないのである。その結果多くの人々は「自然保護」から「持続可能な社会」へと問い自体を変更させていった。私たちの世界は持続可能性を失いつつある、という認識を基盤にして、持続可能な世界を再生するための方法を考えようとしたのである。この変更は環境問題を解決するために必要な課題を拡大した。私たちの生活はどうあるべきなのか。資本主義的市場経済をどうとらえるのか。世界の貧困問題が社会の持続性を失わせているという課題もある。独裁や人権、女性差別などが持続可能な社会の阻害要因になってはいないか。

こうして多くの人々は、持続可能な世界とは持続可能な秩序のなかに展開する世界のことだと理解するようになった。とするとこの秩序とは何か。それが生活のあり方から人権、貧困問題までを含む「体系」としてとらえられた。

この変化は近代思想に慣れ親しんできた人々たちにはある種の安心感を与えたことだろう。なぜならこの発想は、内容は違っても、近代思想の世界のとらえ方と方法が同じだったからである。かつては歴史を進歩させ、文明社会をつくるために、自由・平等・民主主義という秩序を世界に打ち立てようとした。そのためには文明を発展させるための「援助」や人権、差別などの問題が解決されいかなければならないと人々は考えていた。それと同じ方法で、今度は持続可能な世界が構想されるようになった。欧米から生みだされた近代思想は、揺らぐことなく「持続」することができたのである。

だがこうなればまた新しい問題がでてくる。

おそらくこう語る人たちは多いだろう。自然が持続可能でなければ、人間の文明も持続可能ではなくなる、と。だが自然が持続可能とはどういうことなのか。人間の活動自体がある種の自然に圧迫を与えているという現実をどうとらえたらいいのか。持続させる人間の文明とはどのような文明なのか。

このようさまざまな問題がひそんでいいるからこそ、環境問題では先進国と途上国、新興国の対立がたえずでてくる。先進国の文明を持続させるための世界秩序であってはならないという批判が途上国、新興国からはでてくるし、先進国間でも

今日では自然保護の思想も、「持続可能な社会」論として展開してきた理論も、どちらもが壁に突き当たっている。

この思いは日本では静かに広がっていったように感じる。だから自然保護や環境問題に対する意識が広がっていると、自然と人間の関係を問いなおそうとする思想が生まれてきた。自然をどうするかの前に、環境をどうするかの前に、近代以降の自然と人間の関係のゆがみを問いなおそうという発想である。

実践的な活動のなかではこの傾向は日本ではいっそう強かった。里山と人間の関係をとらえなおすところからはじまった里山整備の活動はすでに全国で展開されているし、土と人間の関係を問いなおした有機農業の広がりも、今日では広く定着している。

このような展開が日本では共同体の再評価をも提起していくことになる。自然と人間の関係をかつて支えていた共同体の役割が視野に入らざるをえなかった。

共同体とは何かは単なる客観分析の対象ではないのである。その時代の問題意識が共同体にどのような光や陰を与えているかを抜きにして、この課題に答えることはできない。ただしそれは共同体だけに当てはまることではない。過去はつねにその時代の問題意識からとらえられた過去として

存在するのであるから。もちろん私たちは過去をできるだけ正確に読み解く努力をホウキするわけにはいかない。それをホウキしてしまつたら、過去は偽造された過去になる。だがそのような努力を積み重ねたとしても、過去が解釈された過去として読み取られる以上、その時代の問題意識から離れることはできないのである。

社会が近代化をめざし、人々が個人を基調にしてできた市民社会に未来の可能性を感じているときは、共同体は解体すべき対象であった。この時代には共同体は封建的なもの、個人の自由を奪うものとみえた。しかし個人の社会の問題点が意識され、現代における人間の存在に迷いが生じてくると、さらに **乙** が芽生えてくると、共同体をとらえる「まなざし」も変わってくる。現在の共同体論はここから生まれた。

だから今日の共同体への関心は、 **丙** への思いとしてではなく、新しい探求として展開していくことになった。自然と人間が結びなおし、人間と人間が結びなおしていく。そういう社会のあり方を共同体としてつかみなおす意識が、広く展開するようになったのである。

(内山節「共同体の基礎理論」より)

問二ノ一 傍線部 1・2 にあてはまる漢字を、記述解答用紙の答二ノ一の欄に楷書で記せ。

問二ノ二 空欄 A・B・C に入る語句として最も適切な組み合わせを、次の中から一つ選び、答二ノ二の欄にマークせよ。

- ア… A―実際 B―ただし C―ともあれ
 イ… A―ただし B―だから C―やはり
 ウ… A―ともあれ B―たかだか C―実際
 エ… A―だから B―実際 C―ただし
 オ… A―やはり B―ともあれ C―たかだか

問二ノ三 空欄 X・Y に入る表現として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つ選び、答二ノ三の欄にマークせよ。

- (X) ア…環境の実質化をはかる
 イ…自分たちのあり方を問う
 ウ…問題として鋭く理解する
 エ…歴史的な反省を踏まえる
 オ…何が求められているか把握する

- (Y) ア…温存したい文明
 イ…展開したい社会
 ウ…多様化したい認識
 エ…洗練させたい文化
 オ…合理化したい科学

問二ノ四 傍線部 I「近代思想の世界のとらえ方」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答二ノ四の欄にマークせよ。

- ア…人間と自然との共存があつてこそ、近代という時代を支える真の思想基盤になり得るとする考え方。
 イ…どんな現実にも、その奥に一つのシステムが存在するのであり、それを見据えることでしか世界を理解できないとする考え方。
 ウ…社会の中に困難な課題が生まれ、それが解決され安定した状況になったものが、新しい時代であるとする考え方。
 エ…人間が自由な個人として生き、集まって社会を構成し、その社会が豊かに発展していくことこそ時代の進歩であるとする考え方。
 オ…見えないものを見えるものとし、その中で物事を相対化することを通してこそ現実が認識されるとする考え方。

問二ノ五 空欄甲に、次のア…エの四つの文を正しい順に直して入れたとき、三番目にくるのはどれか。答二ノ五の欄にマークせよ。

- ア…人間の文明の持続可能性なのか、自然の持続可能性なのか。
 イ…それが極端なかたちで展開したのがファシズムだったが、世界を持続可能な秩序下におこうという発想自体に潜む問題は存在しないのか。
 ウ…そもそも世界をある秩序下におこうとすること自体が、かつては植民地やそれぞれの地域の破壊、文化の解体を生み、「帝国主義的世界支配」をつくりだしてしまつたのではないか。
 エ…さらに持続可能とは何のことなのか。

問二ノ六 空欄乙に入る十五字以上二十字以内の一続きの部分を、本文中から抜き出すとすれば、どこが最も適切か。その最初と最後の三字を、記述解答用紙の答二ノ六の欄に記せ。

問二ノ七 空欄丙に入るのに最も適切な二字の漢字を、本文中から抜き出して、記述解答用紙の答二ノ七の欄に記せ。

問二ノ八 本文の内容と合致するものを、次の中から二つ選び、答二ノ八の欄にマークせよ。

ア…日本の近代化がさまざまな立場からの共同体否定論を生み出したのは、歴史の必然としてやむをえないものだったと言える。
 イ…共同体によって支えられている世界が、ある時期を迎えるといつも存在価値がなくなっていくという歴史が繰り返されることで、時代の進歩がはかられて行く。

ウ…人間が自然と結びつき、世界を共有するというあり方が、古くからの日本の共同体には存在しており、それが共同体を支える基層となってきた。

エ…いつの時代にも恵みとしての自然と禍としての自然の両面があるのであり、それを歴史的に跡づけつつ、そうした多様性が現代という時代なのだとする認識を持つことこそ、未来形の思考であると考えられる。

オ…共同体について考えるに当たって大切なのは、今日、社会の中に残っているかつての暮らしのかたちを探ることを通し、共同体の姿を再構成していくという姿勢である。

三 次の文章を読んで、あとの問に答えよ。

ふつうに「あいだ」という場合には、まず二つあるいは二つ以上の数の事物がすでに与えられていて、「あいだ」というのは、それらの事物の欠脱している空白部をさしている。空白部はネガティブな欠如の相においてしか問題になってこない。ところが、「われわれのあいだでは」や「機が熟さないあいだは」の例では、事情はかなり違っている。たとえば、「われわれのあいだではこの言葉は禁句だ」というような場合、この「われわれ」が個々にだれをさすのかは、かならずしもはっきりしていなくてよい。ただ、ある特定の言葉を口に出すか出さないかが、その人が「われわれ」の仲間に入れてもらえるかどうかにかかわる重大問題となってくる。この場合には、「あいだ」といういわば暗黙の諒解の場のようなものが、「あいだ」を取り巻く境界線を規定している、という感じがある。

「機が熟さないあいだは無理をするな」といういいかたでは、この傾向がもっと強い。この「あいだ」がどこで始まってどこで終るのかは、けっして最初からきままっているわけではない。「機が熟する」という一種の歴史的・時間的な過程が進行していて、この進行が未完了であること自体が「あいだ」の本質的な意味内実であり、「あいだ」は、いわば自己自身に内在する過程の動きによって、この進行が完了したときに「あいだ」であることをやめることになる。「あいだ」が何であるのか、「あいだ」がどこで始まりどこで終るのかは、もっぱら「あいだ」自身の自己決定にかかっている。

「あいだ」の原義が物の存在しない空白部をさすという解釈に私が疑問をいだいているのは、私の感触の中で、この「あいだ」(間)と、「あい」(合)会、相、逢)とが、どうしても重なって映ってくるからである。私の郷里の方言では、「あいだ」のことを「あひさ」あるいは「あわいさ」というこれは「あい」あるいは「あわい」から来たものだろうし、「あわい」は「あひあい」のつづまったものらしい。合・会・相・逢のいずれの漢字を当てるにしても、「あい」は二つあるいはそれ以上のものの集合・対面・合体・交流などを表している。英語でいえば together であり、ドイツ語などは zusammen である。「あいだ」には、元来いくつかのものがそこで「あい集まる」場所のような意味があるのではないが、あるいは、すくなくとも、古来の日本人は、物と物との「あいだ」をみたときに、空白をみてとるよりはむしろ、その両側にある二つの物の結びつきのほうに、より多くのこころを向けたのではなかったか。「あいだ」には、もともと、連結とか関係とかの意味が含まれていたのではないのだろうか。

「あいだ」がこのようなして物と物との、あるいは人と人との「会い合う」場所であるとするならば、それと同じ「間」の文字を共有することになった「ま」のほうは、どういった感じで見られることはであろうか。

「あいだ」は、これを欠落とみるにせよ結合とみるにせよ、いわば偶然的の所与であり、しかも、「あいだ」の両側にある物と物、事と事を前景とするならば、いつてみればそれらの背景として、あるいは図に対する地としてみてとられることができるだろう。「あいだ」は、それを「あいだ」たらしめている二つの物や事と、同一の秩序組織には属していない。さきに挙げた、「われわれのあいだ」とか「機が熟さないあいだ」などの用例をみても、親密な関係を意味する「あいだ」でも、やはりそれは、表面に出ている人や物や現象に、裏面から絶えず作用を及ぼしている力場のような感じであって、それ自体はけっして表面に出てこない。

これに対して「ま」のほうは、物の隙間であったり現象の中断であったりしながらも、あくまでもこの物や現象と同一平面上にあって、それらともどもに一つのまとまった秩序形態を、コンフィギュレーション⁴を形成している。「ま」は、それ自身、全体的秩序の不可欠の構成要素であって、その点では、それをとりまく物や、その前後に生じている現象と、まったく同等の資格をもっているといつてよい。そういった「ま」の顕著な例は、建物の柱と柱との間隔であり、音楽における休止である。

柱と柱の間の空間や壁面、音楽の音と音の間の休止は、ただ単に「当然存在する」隙間という以上の、もっと積極的な役割を担っている、といふべきだろう。それは、設計や作曲の段階から、すでに全体のプロポジションのなかに厳密に組み込まれ、個々の部分のアクセントの効果を計算しつくした上で、ある種の意志をもってはめこまれた「ま」である。だから、実際の建築や演奏にあたって、そこにこめられている意図に即して「ま」を正確に再現することが、この上なく重要な課題になってくる。たとえば、邦楽の演奏において「ま」のとりかたがいかに高等技術に属するかについては、かずかずの芸論の教えているところだし、西洋音楽の場合にも、本質的にはまったく同じことがいえる。

私事にわたって恐縮だが、私が学生時代にピアノを熱心に練習していたころ、ハイドンのソナタがどうしてもうまく弾けなかった。音符はそれほど難しいと思わないのに、曲が曲としてまとまらない。そんなときに、音楽を勉強している友人の伴奏者として、ある声楽の先生のところへレッスンについて行ったことがある。そのとき、その先生は、歌曲の一番の難しさは休止符から次の音へ移るところにあるのだ、というような話をして、サーカスの空中ブランコで、一瞬のタイミングのとりかたで墜落してしまうのと同じことだ、という説明のしかたをされた。私はそのとき、ハイドンの難しさも結局は休止符の「ま」のとりかたの問題であって、空中ブランコ式に、からだのリズムで「間髪を入れれない」一瞬の呼吸をつかまえる以外に、この問題は解決できないのだろうと痛感したことを、いまでもよくおぼえている。

「ま」というのは、元来は空間的なイメージ（柱と柱との間など）と結びついたことばであったのかもしれない。多くの辞典類にはとにかくそう書いてある。しかし、私自身の個人的な感覚からいうと、「ま」の真髄はむしろその時間性にあるようである。このような感じかたは、もちろん私の音楽体験と無関係とはいえない。だから、私はけつしてそれを一般化して主張しようなどとは思わないけれども、「ま」を活用したいいろいろな日本語のイデオロムを思い浮かべてみても、私のこの感触を否定するような材料はみあたらない。「まが抜ける」とか「まのびがする」とか「まもなく」とかの用例のことを考えてみれば、私のいいたいことがおわかりいただけるだろう。そして、これにくらべれば、「あいだ」のほうはなんといってもずっと空間的な感じが強い。それは、さきにも書いたように、私の感じのなかで「あいだ」のイメージと「あう」（会・合・相・連など）のイメージがどこか重なりあっていることも関係があるのだろう。空間的といったのは、同時的ないし共時的というほどの意味である。二つあるはいくつかの物が「会い合う」というイメージは、どうしても同時的・共時的なものとならざるをえない。

「あいだ」と「ま」との関係をもっと詳しく考えるために、もう一度音楽の例をひいてみたい。

何人かで合奏をする場合、技術にむらがあつたり気が合わなかつたりして、曲が気持ちよく進まないことがある。そんなときには、なにか自分がひとり苦労して、楽譜にしがみついて演奏していたり、あるいは相手の演奏に合わそうとして、自分のリズムはそっちのけで、ただついて行くだけということになったりする。そんな合奏は、すこしも楽しくないし、音楽の生命であるはずの、湧きあがるような時間の感覚がすこしも味わえない。

それに対して、呼吸がよく合つて気持ちのよい合奏ができている場合には、自分が自分自身の音楽を演奏しているのだという意識も、相手の音楽に合わせているという意識もなくなつて、音楽がひとりだけで作りあげられて行き、自分はそこで生成躍動している音楽的時間にまったく自然に関与しているという意識だけが残らない。そんなとき、音楽は、完全にその何人かの「あいだ」で響いている。あるいは、音楽が自分と共演者との「あいだ」をすっかりみだしている、といつてもよいだろう。「人と人のあいだ」が、単なる空白の隙間ではなくて、ずつしりと重みのある、実質的な力の場であるということは、こういった合奏の経験のある人なら、だれでもすぐに理解できることである。

ところで、合奏者の「あいだ」に生きいきとした音楽を響かせようとするならば、各奏者の呼吸がぴったり合つていなくてはならない。呼吸が合うということとは、そこで鳴っている音楽についていうならば、「ま」のとりかたが合うということである。音と音とを合わせることは、ある程度の技術さえ持ちあわせていれば、さほど困難なことではない。合奏でいちばん難しいこと、またそれだけに合奏のいちばんの妙味は、音を合わせることよりも「ま」を合わせることにある。音楽の生命は、音符に書かれたひとつひとつの音にあるのではなくて、音と音の間の「ま」にはたらいっている湧きあがるような時間のたわむれにあるのだから。

7 日常の人と人との出会いについても、これと同じことがいえるのではないか。自分と相手との「あいだ」が、二人の真に「会い合う」場所となりうるためには、そしてこの「あいだ」の場所が、自分と相手との両者の「自己」を同時に成立させる自覚の場所となりうるためには、そこに「ま」と呼ばれるようなはたらきが十分にはたらいていて、二人がそれぞれ自己自身の歴史を生きていながら、その「あいだ」においては、共通の唯一の時間の生成に関与しあつていて、ということがなくてはならないのではないだろうか。「自己が自己ならざるものに出会つた、まさにその時に、ぱつと火花が飛散るように、自己と自己ならざるものとがなにかから生じる」（木村敏「人と人との間」）。この「なにか」が、さしあたり人と人との「あいだ」であるとするならば、「火花」は「ま」にあたるといつてよいだろう。

結局のところ、「あいだ」と「ま」との関係は、磁場と磁力との関係と類比的に考えることができるのではなからうか。磁場を形成しない磁力はなく、磁力をもたない磁場はありえないのと同じように、「あいだ」が自己と他者との同時成立の場所、自己発見の場所でありうるためには、原時間的な契機^{注2}としての「ま」のはたらきが不可欠の構成成分となる。

（木村敏「自分ということ」より）

（注1）配置によって決まる形状、外形、輪郭。

（注2）著者は、別の箇所でも、「原時間」という言い方について次のように説明している。「ま」の本質は、ものともとの、あるいはこととこととの「あいだ」にはたらく「機」であるといつてはいけないだろうか。「機」とはそれ自体「はたらき」であり、「はずみ」である。「ま」はそれ自体時間なのではなくて、「時間」といわれるような実感をそのつと生み出す源泉であり、いわば発生機における時間、「原時間」ともいうべきものではあるまいか。

問三ノ一 傍線部1「空白部はネガティブな相においてしか問題になってこない」とあるが、そうした「あいだ」の用例として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答三ノ一の欄にマークせよ。

ア…「私は二人のあいだに割って入った」

イ…「あなたがいないあいだのことは心配しないで」

ウ…「夫婦のあいだにできた子ども」

エ…「彼が生きているあいだにどうにかしないとイケない」

オ…「あの家では、親子のあいだがよくない」

問三ノ二 傍線部2「あいだ」が何であるのか、「あいだ」がどこで始まりどこで終るのかは、もっぱら「あいだ」自身の自己決定にかかっている」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答三ノ二の欄にマークせよ。

ア…「あいだ」はたんなる通過地点ではなく、まず「あいだ」があつて、その両側に始まりと終わりができたということ。

イ…「あいだ」がまず自身の性格をはっきりさせ、その役割を明確にすることで、その周囲の性質も明確になるということ。

ウ…「あいだ」はあくまで未完了の過程であるが、その過程の進行をどこで終了させるかの決定権を「あいだ」自身が有しているということ。

エ…「あいだ」の輪郭はそれなりに最初からあるが、「あいだ」は、それ自身が生成していく過程でその輪郭線を移動し、変化させていくということ。

オ…「あいだ」を成立させる枠組みが先に確固としたものとしてあるのではなく、「あいだ」がその枠組みに作用を及ぼすということ。

問三ノ三 傍線部3「あいだ」には、もともと、連結とか関係とかの意味が含まれていたのではないのだろうか」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答三ノ三の欄にマークせよ。

ア…「あいだ」はそれぞれのものが重要なのではなく、その両側にあるものの関係性や結びつきが大事であるということ。
 イ…「あいだ」は、単なる中間部ではなく、その両側のものが遭遇し、交流する場として大きな意味を持つということ。
 ウ…「あいだ」は、それ自身としてはあくまで明白な性質を持たないが、だからこそ、その両側のものを近づけ、対面させる契機として価値を持つということ。

エ…「あいだ」は、その両側のものの出会いを可能にしつつ、それ自身が関係性のなかで積極的に変化していくということ。
 オ…「あいだ」は、その周囲のものを集合させる場として大切であり、そこで複数の物が合体し、新たな組織を生むということ。

問三ノ四 傍線部4「ま」は、それ自身、全体的秩序の不可欠の構成要素であって、その点では、それをとりまく物や、その前後に生じている現象と、まったく同等の資格をもっているといっている」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答三ノ四の欄にマークせよ。

ア…「あいだ」がその両側のものの背景のような役割を演じるのに対し、「ま」は、同一平面上にある周囲の組織のなかにみごとに溶け込み、個別要素間の差異を消去して、組織の緊密化に貢献しているということ。
 イ…「あいだ」があくまで二つのものの隙間であり、表面に出てこないのに対して、「ま」は連続性を成り立たせるものであり、その意味で、その前後の要素と同じ性質を持つようになり、まとまりのある秩序を形成するということ。

ウ…「あいだ」が関係性の領域として潜在的なものにとどまるのに対し、「ま」は表面に出て顕在化し、周囲のものと同じ資格を有して、個別要素間の全体的な関係性の構築において主導的な役割を演じるということ。
 エ…「あいだ」が出会いの場として意味を持つのに対し、「ま」は、そうした出会いをその出会いの当事者たちにとって共通の出来事にし、そのように関係性を形成する点で、周囲と同等の価値を帯びるということ。

オ…「あいだ」は、その周囲のものがあつてはじめて成り立つという意味で消極的な資格しか持たないのに対し、「ま」は、それをとりまく物と同様に積極的資格を持ち、個別要素を総合した全体的秩序をみずから構成していくということ。

問三ノ五 傍線部5「ま」の真髄はむしろその時間性にあるようである」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答三ノ五の欄にマークせよ。

ア…「あいだ」が中間領域としての広がりをもっている点で空間的であるのに対し、「ま」はその中間領域において二つの物を出会い、結びつけるという働きにおいて時間的であるということ。
 イ…「あいだ」が複数の物の出会いの場として静態的であり、空間としてあるのに対し、「ま」はそうした場での出会いの過程として考えられ、つねに時を刻みつつける点で動態的であり、時間としての様態を帯びているということ。

ウ…「あいだ」においてはその両側のものが関係づけられるという点で空間的であるのに対し、「ま」はその関係性を實現させ、全体を形づくる契機という点で時間的であるということ。
 エ…「あいだ」はその両側の物に対して欠損状態にあるという点で空間的であるのに対し、「ま」はその欠損状態を埋めるように縫い合わせていくという意味で、時間的であるということ。

オ…「あいだ」がその両側との関係で厳密に規定され、輪郭を与えられて空間化するのに対し、「ま」は、その周辺との関係で伸び縮みする性格があり、その意味で、時間的と見なせるということ。

問三ノ六 傍線部6「人と人とのあいだ」が、単なる空白の隙間ではなくて、ずっしりと重みのある、実質的な力の場である」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答三ノ六の欄にマークせよ。

ア…ひとりひとりの演奏者が自分勝手に演奏するのではなく、各自のあいだに存在する譜面記号を忠実に音として再現することで、それぞれの正確な演奏が精密に合致する高度な音楽がもたらされ、それが大きな力を生み出す。
 イ…ひとりひとりの演奏者が独自の結晶体としての力を有した音楽が湧きあがって来る。

ウ…ひとりひとりの演奏者が楽譜にしがみつくのではなく、互いの演奏に合わせようと配慮し、そのことで演奏者間にたぐい稀な調和が生まれ、そうして出来上がった力の総和が各自に共通する独自の音楽として結実する。

エ…ひとりひとりの演奏者が、たがいの演奏のあいだにある溝を埋めるべく、彼らのなかでも力量のある指導的な演奏者に合わせていくことで、一段上のレベルの演奏行為として、より力強いものとなった充実した音楽が湧きあがる。

オ…ひとりひとりの演奏者が各自のパートの演奏を自発的におこない、それがぶつかり影響を与え合う力の集合体となって、各演奏者に共通しつつ、しかも特定の演奏者に限定されない音楽がそこに生成する。

問三ノ七 傍線部7「日常の人と人との出会いについても、これと同じことがいえるのではないか」とあるが、筆者の考えに従うなら、日常的な場における理想的な人間関係はどのようなものであるか。「あいだ」と「ま」の二語を必ず一度以上用いて、一〇〇字以上一三〇字以内で記述せよ。（解答は記述解答用紙の答三ノ七の欄に楷書で記述すること。その際、句読点、括弧記号などもそれぞれ一字分に数え、必ず一マヌ用いること。）